

第18回 さっさと子離れ・親離れ



私の両親は、私に物心がついた頃から、「大学は薬学部がええよ」と機会があるごとにつぶやいていました。特に母親は、女性の社会進出の難しさを身をもって体験していたからか、資格があれば女でも高い自由度で働けると考えたのでしょう。こういう両親に育てられたので、私は大人になったら働くのが普通だと思ってました。親からの縛りはこれぐらいで、やりたいように学校生活を楽しむことができました。中学校では、午前で授業が終わる土曜日の午後は、理科室にいそいそと出かけ、昼食抜きで顕微鏡を覗き込み、池の微生物を飽かず眺め、家路につきたい先生を困らせていました。クラブの理科部の部長になると、学校と交渉して親同伴の深夜の天体観測を実行したり、無線の資格を取っては「ハローCQ ハローCQ」とマイクに向かってみたり、ラジオの気象予報を聞いては天気図作りに精を出し、先生・部員交えて競争をしていました。

そして、これが親になると、抵抗なく「社会における意識・無意識の女性差別の蔓延を考えて、娘の進学先は国家資格を取得できる学部を推奨する」という、わが家の子育て憲章第3条を策定するに至るのです。ちなみに、第1条は「子は別人格であることを心せよ」です。別の言い方をすれば、子を私物化することなかれ、あるいは、子には自分にかかる以上の期待をするな、かな。第2条は、「子が進学を希望する場合は、社会科学系以外の学部を推奨する」です。この条項が生まれた理由は、私たちが大学生の頃の社会科学系の大学生が全く勉学をしていなかったからです。最近、アメリカにいる大学生の孫に尋ねたところ、アメリカでも社会科学系の学部学生は勉強していないとのことでした。締めくくりの第4条は、「子が成長したのちは、間髪をおかずに子離れ・親離れする」でした。

今回はわが家の子離れ・親離れを紹介します。

子を育てる以上、親離れ・子離れは不可欠です。いつ親離れを誘導するかを夫と協議した結果、大学進学をその時期とすることに決めました。

もともと、子供が可愛い盛りでも、私も夫も自分のことで手一杯だったからか、それとも、それが二人の本性的なかわかりませんが、幼い子供を特別に可愛いがったり、勉強をみたりとか、手をかけることはほとんどありませんでした。

むしろ、高校生とか大学生になって、対等に話ができるようになってからのほうが、子供と親密になったような気がします。

ただし、長じて急に親しげに近づいてきた親を子供たちは「イヤヤッ！」と



思っていたかもしれませんが（笑）。

閑話休題。幸い子供の年齢は、最年長をX歳とすると、X-1歳、X-7歳、X-10歳と、結構飛び飛びです。仕送りも何とかできそうということで、子は大学生で一人暮らしを始めるという計画を実行しました。

この計画には、「一人暮らしだと寂しいので友達ができ、うまくいけば連れ合いにも遭遇できるのでは！」という親離れを急かす皮算用がありました。もともと、蓋を開けると、私たちの魂胆を尻目に、長男、次男、そして長女は大学とその周辺で着々と人脈を築き上げて、勝手にさっさと家庭を築いて、去って行ってしまいました。子離れ・親離れです。事前に計画と目論見・魂胆まで作って身構えていたのに、ちょっと拍子抜けでした。

末娘も、彼らに後れを取ったものの家庭を築き、私たちは名実ともに子育てを完遂しました。

残るは、「夫離れ」、「妻離れ」です。

ですが、ふたりとも加齢とともにshort memoryの低下が著しく、「ふたりで、やっと一人前」状態になってしまいました。「僕の眼鏡見てない?」、「かけてるやん!」、「私が読んだ新聞しらん?」、「トイレにあったでえ」、毎日が、漫才三昧です。

ということで、時や遅し。最後の詰めはこの世では無理かも?!



わが家のルールブック:

節分恒例の豆まきもわが家では、蒔いた豆を掃除するのが面倒ということで、箸を使った「豆拾い競争」に変身。炒り豆を入れたカップから、豆を箸でつまみ上げ、制限時間内に別の空の容器に何個入れることができるかを競いました。

末の娘が参戦し始めた頃は、彼女だけ箸の代わりにスプーンを使っていいことにしました。6人で戦闘開始! 最下位は、箸遣いのへたくそな夫でした。オーーーーーッと!!

